

避難所の FM品質を考える

部会長 野瀬 かおり

のせ かおり

ファシリティマネジメント総合研究所
認定ファシリティマネジャー

当部会では、FM品質には7つの軸があると考えている（図表1）。これらの軸は、建物・設備、サービス、まち、インフラなど、さまざまなファシリティを対象とした品質を考える際に利用できる。そして、その中心にある「安全性・信頼性」は、ファシリティの品質評価において、最も重要で、なくてはならない視点である。

近年、自然災害が激甚化し、全国各地で多くの自治体が被災し、多数の人々が住まいを追われ、一定期間の避難所生活を余儀なくされている。日本は災害大国であるにもかかわらず、災害が起こるたびに、過去幾度も設置された避難所の生活環境が問題視され、海外と比較して「日本は遅れている」と指摘されている。過去の避難所設置事例をFM品質から見ると、衛生管理、温度調整、スペースの確保、プライバシー配慮、防犯対策など、ファシリティマネジャーとして看過できない問題が多い。今後さらに増加すると予想される災害に備え、安全に安心して避難できる「避難所」の整備が求められる。

そこで当部会では、避難所というファシリティの品質について検討することにした。大切なことは、気候・風土・文化・生活習慣に適した解決策を講じることである。海外のやり方をそのまま取り込むのではなく、それらを参考にしながら、日本に適した方法を取り入れていきたい。

以上のような考えから、2024年は「地域防災計画」「避難所運営マニュアル」（図表2）の調査を行うとともに、国内の災害時における避難所の実態や、台湾やイタリアなどの海外事例を集めた。台湾の避難所では、支援グループと行政が連携して運営を行っている。日本と同じように体育館を利用することがあるが、簡易間仕切りが設置され、プライバシーが確保されている。2024年4月3日に起こった台湾東部沖を震源とする地震では、震度6強を観測した花蓮県で、発災から3時間後には避難所での被災者の受け入れが始まり、4時間後にはほとんどの設備が整っていた。イタリアでは、避難所に必要なテントやトイレなどの資材を、国が主導して全国の拠点に備蓄し、すぐに持ち出せる状態で保管している。また避難所では訓練を受けたシェフが食事を提供する体制が整えられていることがわかった。

当部会では例年1泊2日の合宿を開催している。2024年は東日本大震災で被災した石巻・女川を有志で訪れ現地の方から「市役所で1カ月避難生活を送った」という体験談を聞くことができた。また、「訓練が行事となってはだめだ」「災害から身を守った事例を知ること大切」という教訓を学んだ。合宿報告は、JFMA ホームページの調査研究部会のページに掲載しているので、ぜひご一読いただきたい。◀



図表1 当部会が考えるFM品質7つの軸



図表2 内閣府防災担当がまとめた「避難所運営ガイドライン」には、実施すべき対応業務のチェックリストが掲載されている